自分らしく働くため

キャリアアップセミナー

「いきいきキャリアアップセミナー」(県共催)が１月21日、長沼ボート場クラブハウスで開催されました。

セミナーは、誰もが働きやすく活躍できる社会の実現を目指し、登米コミュニティエフエムの佐藤万里子さんをゲストに迎えて開催。佐藤さんがH@!FM開局準備の中で、自分に向いていることを見つけた話や、仕事に対する思いなどを聞きながら、これからの社会について考えました。村田真紀子さん＝南方町大門＝は「広報紙を見て参加しました。皆さんの話を聞いて自分のありたい姿に新たな気付きがあり、そこに向かって取り組んでいきたいと思えました」と話していました。

グループワークでは、これまでの人生で学んだことやできるようになったことなどを、参加者同士で話し合って共有しました。

新たな年の安全誓う

消防団・指導隊が出初式

市交通安全指導隊(山形智章隊長)、市防犯指導隊(菅原精一隊長)と市消防団(浅井亮喜団長)が、市民の安全・安心を守る誓いを胸に、出初式を実施しました。

両指導隊の合同出初式は１月10日、トライデントなかだアリーナで開かれ、約90人が参加。熊谷康信市長らから服装などの点検を受けた隊員は、新年の活動に向けて気持ちを引き締め、結束を高めました。

市消防団の出初式は１月11日、水の里ホール・Abebisouで開かれ、約600人が参加。団員らは、地域の安全と無火災を祈願するとともに、地域の防災リーダーとして決意を新たにしました。

消防団出初式の式典後には、一斉放水を実施。空高く、力強く舞い上がる放水の様子に、観覧者から歓声が上がりました。

音楽や体験に心弾む

活気に満ちたお祭り開催

「登米なないろフェスティバル」(市制20周年祭実行委員会主催)が１月25日、水の里ホール・Abebisouで開かれ、市内外から千人を超える人が訪れました。

イベントは、市制施行20周年を記念して開催。NHK連続テレビ小説「おかえりモネ」に出演した浜野謙太さん率いる音楽バンド「在日ファンク」や本市出身のミュージシャン「寒椿」のライブ、地域の伝統や木材に触れる体験ワークショップ、キッチンカーの出店があり、子どもから大人まで楽しみました。氏家悠乃さん(７)＝米山町瀬ヶ崎＝は「凧づくり体験をしました。自分で作った凧を揚げるのが楽しみです」とほほ笑みました。

「在日ファンク」の迫力ある演奏を間近で体感。アンコールでは多くの観客がステージに上がり会場全体が盛り上がりました。

写真の「楽習」発表会

武川ゼミ生徒らが作品展

「令和７年度登米写真大学武川ゼミ生徒作品展」が１月15日から17日まで、水の里ホール・Abebisouを会場に開催され、３日間で延べ284人が訪れました。

作品展では、本市出身で鉄道写真家の武川健太さんを講師に迎え、昨年度から開催しているシティプロモーション事業「登米写真大学武川ゼミ」の参加者が見つけた、本市の魅力や美しい瞬間をおさめた作品の数々を展示。渡邊政さん(73)＝米山町森腰＝は「今年初の参加でしたが、年代も性別もさまざまなメンバーで、ワイワイ楽しく写真を学べたのが本当に楽しかった。来年も参加したいです」と感想を話しました。

最終日には武川さんによるギャラリートークも実施。講習の思い出などを振り返りながら、各作品の見どころを解説しました。

将来の姿を思い描く

高校生と企業が情報交換

「登米市企業ガイダンス」が１月27日、エスビー食品とよま蔵ジアムで開かれ、42の企業や団体と市内外の高校１、２年生378人が参加しました。

企業ガイダンスは、早い段階から市内企業の魅力などについて知ってもらい、市内企業への優秀な人材の就職と若者の定住を目的に開催。登米総合産業高校機械科２年の上野礼人さんは「説明を聞いて、仕事内容のほかに職場の雰囲気も知ることができたのですごく参考になりました。市内での就職を希望しているので、高校で学んだ知識と技術を生かせるような仕事をして、地域に貢献したいです」と将来を見据えていました。

参加者は、興味のある企業などから説明を聞き、質問したり、メモを取ったりしながら、将来の姿を思い描いていました。

まちの未来を新聞に

未来新聞コンクール表彰

「第18回子どもたちが考える登米市の未来新聞コンクール表彰式」が１月18日、豊里公民館で開かれ、入賞した12グループに賞状と記念品が贈られました。

コンクールは、本市の未来を担う子どもたちが、自分の住む地域の良い点や課題などを見つけ、未来のまちづくりに興味を深めることを目的に開催。壁新聞部門の小学５年生、小学６年生の部に加え、今年度から新設された「デジタル部門」(小学５・６年生共通)の計３部門に、市内小学校から62作品の応募がありました。入賞した12作品は、市公式ホームページに掲載しています。

表彰式では入賞者が作品内容を発表。自由な発想と取材を通して作られた新聞の数々に、会場から大きな拍手が送られました。